

## 投稿

## 壽岳さんの思い出

西浦慎悟（東京学芸大学・教育）

天文教育2012年1月号に壽岳潤氏の退会の知らせが掲載された。ご逝去されての退会とのことだった。後になってから、天文学会のメーリングリスト tennet には、既に2011年11月18日に訃報が流れていたことを知った。今の勤務先へ異動したときに、私は何となく面倒で tennet のアドレス変更の手続きをしなかったのだ。今回、初めてそれを後悔した。

ここからはいつも通り壽岳さんと呼ばせて頂くことにする。きっと御機嫌を損ねられることはないだろう。

私が壽岳さんを初めて知ったのは、1994年に岩手で開催された、天文・天体物理若手の会主催の夏の学校・天文学と社会分科会での基調講演だった。講演タイトルは「誤った科学(フィクションサイエンス)に対して」だ。今思えば、この講演は壽岳さんの天文教育者・科学教育者としての側面を物語っていた。ただ、この時の私は修士1年で、何に関しても不勉強であり、直接お話しする機会は全くなかった。

壽岳さんと私が、初めて直接、お話しをしたのは、1996年9月、長野県木曾郡上松町で開催された木曾シュミットシンポジウム(研究会タイトルは「木曾シュミット・観測の新展開」)でのことだ。当時の私は東北大学の博士課程の大学院生で、初めての研究会発表ということで舞い上がっていたのだと思う。まだまだ何も知らないこともあり、その前年から行っていたコンパクト銀河群の可視光深撮像観測の初期成果を、随分と大胆に発表したものだった。さらに、この研究会には偉大な

先人達が大勢出席されていたのだが(壽岳さんもそのお一人で、金属欠乏星の探索についての発表をされていた)、当時の私はその先人達のことをほとんど知らないという失礼極まりない若造だった。壽岳さんについても、先の夏の学校でお名前を存じ上げているという程度だった。しかし壽岳さんは、私のような青二才の発表に対しても「このテーマでハッブル宇宙望遠鏡にプロポーザルは書きましたか?」という質問をして下さった。この時は、私との年齢差もあって、少し怖い感じの方だと思ったことを、今でも覚えている。



1996年度木曾シュミットシンポジウムに出席される壽岳さん(シンポジウム集録より)

この後、私が木曾シュミット望遠鏡を使う観測を長期間続けたこともあり、木曾シュミットシンポジウムを中心に、壽岳さんとお顔を合わすことが頻繁になった。壽岳さんは、当時の私と同じくらいの若い方々とも共同研究をされており、休憩時間や懇親会などでは、私のような若者にも、にこにこしながら話かけてこられた(しかもこういう時は、妙に無邪気な雰囲気なのだ)。しかし、壽岳さんの発表

者への質問は、いつでも老若男女・分野を問わず鋭い(勘違いされていることも時々あったが)。私の壽岳さんのイメージは、いつの間にか、木曾観測所の御意見番になった。

学位を取得した後、私は東北大学で2年間オーバードクターをして、2001年4月から木曾観測所でポスドク研究員(当時の研究機関研究員)に就いた。前述した木曾シュミットシンポジウムは、慣例的に木曾観測所の新人が世話人をするようになっていた。従って、2001年の木曾シュミットシンポジウムの世話人は私が務めることになった。世話人として、シンポジウムのアナウンスを **tennet** や **gopiranet** に流した直後のことだった。観測所に滞在中の壽岳さんが私の研究室へ、手書きの参加申込書を持って来られた。私が「早いですね!最初の参加申し込みですよ」と言うと、にっこり笑って「西浦さんが世話人だからねえ」と仰った。

木曾観測所の職員として、観測者のサポートをすることもしばしばあったため、観測中に壽岳さんとお話する事も多くなった。勿論、楽しい話だけでは無い。「今のままの論文数だと普通以下の天文学者で終わってしまうよ」と言われたこともある。自分でも頭では分かっているのだが、さすがにガツンと来る。また、私のコンパクト銀河群内の潮汐矮小銀河を議論した論文がPASJに掲載されたときには、「そうそう、こういう研究をしなくちゃいけないよ」と(何故か気に入って頂けたようで)褒めて下さった。私が誰かに論文を褒められたのは、今のところ、この時を含めて2回だ。しかし、当時、何とかしてパーマネントポストに就こうと足掻いていた私にとって、この言葉は大きな励みとなった。

壽岳さんの言葉のお蔭もあったと思う、私は念願のパーマネントポストを得て、2003年の秋に木曾観測所から現在の職場である東京学芸大学に異動した。壽岳さんの体調が思わ

しくなく、外出するのも難しいらしいという噂を聞いたのは、この直後のことである。しかし、同じ頃に開催されたある研究会の世話人の中に、壽岳さんのお名前があったため、結構お元気にされているみたいだなあ、と何となく思っていた。

ただ、この年が、壽岳さんが木曾シュミットシンポジウムに出席された最後の年となった。私が壽岳さんとお会いしたのも、この時が最後である。この時に何をお話したのか、私は不覚にも全く覚えていない。

今更ながら、現在なかなか論文を書かずにいる私を、あの時のように、一喝して頂きたかったとも思う。これからはもう、頑張っただけでこんなに研究しましたよ、と言えないと思うと、実に寂しい。

特に悔しいのは、最初にお会いした木曾シンポジウムでのご質問に「コンパクト銀河群は遠いので、HSTでも星に分解することは出来ないし、視野が狭いために可視光エンベロープの全容を捉えることも出来ません」と答えられなかったことだ。いや、壽岳さんのことだ、もしかしてもっと深い意味があったのかも知れない。それを今となっては確認できないことが、さらに悔やまれて仕方ない。いつになるか分からないが、いずれ何処かでお会いできたときにお伺いすることとしよう。

しかし、何より私がこのような話を綴ったことに、壽岳さんご自身が草葉の陰で驚いていらっしやるかも知れない。壽岳さんにとって、私など多くの知り合いの一人に過ぎなかった事と思う。しかし、壽岳さんの言葉は確かに糧として私の心に中に残っている。

壽岳さん、お疲れ様でした、そして、本当にありがとうございました。

西浦慎悟

nishiura@u-gakugei.ac.jp